

<株式会社エフエム東京 第 511 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：令和 6 年 9 月 3 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 11 階大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

ロバート キャンベル 委員長	佐々木 俊尚 委員
松田 紀子 委員	山口 真由 委員（レポート）
柴崎 友香 委員	福里 真一 委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（6 名）

唐島 夏生	代表取締役会長
黒坂 修	代表取締役社長
内藤 博志	取締役編成制作局長
宮野 潤一	編成制作局次長 兼 編成部長
山領 由紀	編成制作局制作部長
延江 浩	編成制作局ゼネラルプロデューサー

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 内藤放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴（52 分）
TOKYO FM 特別番組 ポール・オースター追悼
「RADIO ブルックリン・再会の夏」
2024 年 8 月 14 日（水）20：00～20：55 放送

＜議事内容＞

議題 1:最近の活動について

■「マイナビ 閃光ライオット 2024 produced by SCHOOL OF LOCK!」開催

平日午後 10 時から放送中の「SCHOOL OF LOCK!」では、ソニーミュージックとのタッグで 10 代限定のアーティストオーディションイベント『マイナビ閃光ライオット 2024 produced by SCHOOL OF LOCK!』を、お台場の Zepp DiverCity (TOKYO) にて開催いたしました。“10 代限定の音楽の甲子園”ともいうべきこのイベントへの応募総数は 3,078 組。2 月にエントリーを開始し、音源審査、全国スタジオ審査、ライブハウス審査を経て選ばれた 10 組のアーティストが演奏を披露し、グランプリには宮城県出身の 3 ピースバンドが輝きました。応援アンバサダーの 10 代俳優・豊嶋花による開会宣言や、水曜日のカンパネラによるゲストライブが 10 代を盛り上げ、会場にはのべ 1,400 名のリスナーが来場、オンライン配信は累計 270,065 人が視聴しました。



▲グランプリを受賞した宮城県発の 3 ピースバンド「admires」



▲応援アンバサダー 豊嶋花



▲ゲストライブ 水曜日のカンパネラ

■番組イベント「山崎怜奈の誰かに話したかったこと。」『ダレハナ夏祭り』開催

平日午後 1 時から放送中の「山崎怜奈の誰かに話したかったこと。」では、8 月 18 日（日）、番組イベント『ダレハナ夏祭り』を開催いたしました。昨年は TOKYO FM ホールで開催しましたが、今年是有楽町よみうりホールに会場を広げ、ゲストにラジオパーソナリティとしても活躍中のガールズバンド・Gacharic Spin のアンジェリーナ 1/3 や、お笑い芸人の遠山大輔を招き、番組での人気企画の特別バージョンを上演。チケットは完売、番組グッズの販売も好調でした。



▲集合写真



▲山崎怜奈(左)とアンジェリーナ 1/3(中央)と遠山大輔(右)

■番組イベント「Skyrocket Company」『スカロケ大盆踊り大会』開催

夕方 17 時から放送中の「Skyrocket Company」では、8 月 18 日（日）、昨年に続き足立区の西新井大師の盆踊り「大師なつまつり 2024」との共同で、『スカロケ大盆踊り大会』を開催しました。

当日は、境内でファンミーティングイベントを 2 回開催後、オリジナル曲「スカロケ音頭」に合わせた振り付けの大盆踊り大会へ突入。途中、サプライズでスカロケのヘビーリスナーでパリ五輪のレスリング・男子グレコローマンスタイル 60 キロ級で金メダルを獲得した文田健一郎が飛び入り参加。リスナーからは声を合わせた「おめでとう！」コールが沸き上がりました。集った 3,000 人を超えるリスナーが、息を一つに合わせて「スカロケ音頭」を踊る、大盛況のイベントとなりました。



▲クライマックスの盆踊り



▲文田健一郎選手登場

【番組名】

TOKYO FM 特別番組 ポール・オースター追悼

「RADIO ブルックリン・再会の夏」

2024 年 8 月 14 日（水）20：00～20：55 放送

【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、8月14日（水）に放送した TOKYO FM 特別番組 ポール・オースター追悼「RADIO ブルックリン・再会の夏」です。

この番組は、今年の4月30日に逝去された現代アメリカ文学を代表する小説家・ポール・オースター追悼特番です。ラジオ好きとしても知られたポール・オースターが DJ を務める架空のラジオ番組仕立てとなっています。

一夜限りのラジオ番組「RADIO ブルックリン」でポール・オースター役を務めるのは長塚圭史。ゲストに招いたのは、実際にポール・オースターの作品をほぼ全て翻訳し、親交を深めてきた翻訳家の柴田元幸。楽曲と共に、ポール・オースターと柴田とのエピソードを振り返る形で、追悼した特別番組です。

【委員の意見および社側説明】

〔○〕委員意見／〔■〕社側意見

○最初、小川洋子氏のコメントから入って、次にナレーション紹介があって、途中でポール・オースターが DJ を務める番組ということが分かってくる。その入り方が複雑で、理解するまでに時間がかかった。構成を理解した上で改めて 2 回目を聴くと、いろいろな本からの引用や、柴田氏の深い話が入ってきて、すごく充実した番組だと思った。初めて聴いた時は少し混乱した。落ち着いて 2 回目を聴いていると、工夫やポイントを押さえた作りになっていて、ポール・オースターの作品をすごく読んでいる人にもまだあまりよく知らない人にも伝わるような番組になっていたと思う。特にポール・オースターの小説から引用されている部分は、言葉の力をすごく感じた。番組の最後に、柴田氏が最後に会ったときのことをしみじみ語っていて、ものすごく沁みるところがあった。内容が充実しているのもう少しシンプルな構成でも良かったのでは、という気もした。

○この番組を作ったこと自体が素晴らしい。ポール・オースターは文学の巨匠だが、一般の人が誰も知っているというわけでもない。このような方の追悼番組をしっかりとした構成で作って、それを伝えようとする事自体が、とても知的で、テレビでは絶対できないと思う。YouTube とも違う。ラジオにしかできないのかもしれない。

○もしかしたらこの番組は、すごくポール・オースター好きの方がいて、その個人の方の想いで作られているのかもしれないなと想像した。そういう番組の作り方は、すごく良いと思う。この番組を作った方の最大の目標が、仮に、この番組をきっかけにポール・オースターを読みたいと思う人が出てきたり、読み直してみたいと思う人が出てきたりと、いろいろな人の心の中で復活して欲しいというようなことだとすると、私はそう思えたので、成功している思う。

○翻訳家の柴田氏に求められた要求が高いが、それがちゃんとできていて感心した。翻訳家がポール・オースターと会話しているという体で、その中で人物像だったり作品だったり家族のことだったりとかを語らせるという、演技ではないけど、演技でもあるという。役所広司レベルの演技を、俳優ではない柴田氏に要求していて、それが様になっていて。柴田氏の表現力に感服した。

○番組の構成としては、ポール・オースターがお盆の時期に黄泉の世界からよみがえってきて、一夜限りの DJ をつとめる、その設定自体は素晴らしいものだし、魅力的な設定。であれば冒頭から「どうも、こんばんは。ポール・オースターです」「自分、数ヶ月前に死んじゃったみたいなんですけど、なぜか今復活しました」みたいにもっと振り切って、その体で最後まで番組が進んでもいいのでは。小川氏と

か九段氏のコメントも DJ が紹介する形式で、最後に「(この番組の構成は) こういうことでした」というような。とはいえ、個人の想いでできている感じがすごく伝わる番組だった。それは素晴らしいことで、また、こういう知的なものを取り上げるということもとてもいいと思う。

○ポール・オースターと柴田氏の絶妙な距離感、雰囲気のにじみ出ている番組だった。海外の作家にとって、翻訳家はバディみたいな存在だと思うが、そのバディ感がよく出ていた。プライベートでの付き合いで、娘さんの料理がまずかったらどうしようと思ったとか、おいしい所に全然連れて行ってもらえなかったとか。そういうすごく近い感じで、人生を共にした人たちならではの温かい言葉を柴田氏が語るからこそそのオースターの魅力が、十分に伝わってきた。この番組を通じてオースターに興味を持って作品に触れたい、本を読みたいと思う人は多いと思う。

○亡くなられた方を追悼する番組として、粹で、しかも作家さんの魅力をしっかりと伝えられる一番近い人の肉声で語られるオースターの姿が切なく、かっこいいと思った。オースターがラジオ好きだったので DJ を務めるという構成だが、番組の中でラジオ好きに関するエピソードがなかったので、少し紹介されているといいと思った。番組冒頭の構成も少し分かりにくかったのもう少しすっきりした構成だったらもっと良かったとは思った。このような追悼番組は、関係者やご遺族の方も嬉しいだろうし、制作したことが素晴らしいと思った。

○他の委員の方も意見していたが、テレビでも YouTube でもないというのはその通り。この番組はテレビでは実現しにくいと思う。また、YouTube は一昔前にこのような知的な世界に進んでいくのかという期待があったがそうはならず、わちゃわちゃした世界観が広がっている。このような落ち着いた、知的世界をゆっくり探訪するコンテンツの場が減ってきている気がして、ラジオがその受け皿になる可能性が十分にあると思う。ぜひ今後も第二、第三の番組をやってほしい。

○一点気になったのが、長塚さんのトークがとても流暢で美しくて。オースターは 77 歳で亡くなっているのもう少しザラついた話し方というか、それなりの声の方を起用する方が良かったと思う。柴田元幸氏の朗読を過去に聴いたことがあるが大変素晴らしかった。もう少しキャスティングと、演出が違ったら、柴田元幸氏の声も生きて、もっとドラマチックになったのではないかと少し物足りなさを感じた。

○柴田元幸氏がオースターとの人間的な結び付きを、その豊かな表現力で、そして何よりもオースターと会話しているような自然さで語っているのが引き込まれた要素だと思う。どういう形でインタビューを録ったのか、すごく興味が湧いた。曲の紹介が際立った形ではなく、会話の中でさりげなくなされているのも、音楽・朗

読や日本の作家からのメッセージを含めて、一連の流れとして聴けた。

○オースター役の長塚圭史氏が、柴田元幸氏の自然さに対して、無機質だと感じた。まるで中学英語授業のリスニングで聴いた模範英語のように。これは意図的なのか、例えば作家の実際の話し方に寄せたのか、それが気になった。

○構成が分かりにくかったという委員もいましたが、私はとてもスッと入って来た。確かに「これは誰？」というシーンがあり、それが後になってやっとわかったがそれはそれでいいと思った。

■柴田元幸氏には企画の最初の会議から入って頂いた。長塚圭史氏の起用については、オースターの声もいろいろ研究して、「ちょっと距離感があるナレーションがいいのではないか？」ということで、あのような設定をした経緯がある。柴田氏の収録は、長塚氏とは一緒にせず、1人でスタジオに入って別の聞き役を立てて収録した。柴田氏については映画『PERFECT DAYS』の演技もあり、行けるという気がしていた。様々なご意見を頂き、ありがとうございました。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「ドライバーズインフォ」

9月28日(土) 5:55~6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>